ぼちぼち

NPO 富士北麓まちづくりネットワーク会報

《 第 30号 》

発　行：ＮＰＯ富士北麓まちづくりネットワーク
発行日：２０１１年４月１日
責任者：代表理事 法村香音子
住　所：〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉９６５－４
制　作：広報渉外部会
事務局電話＆FAX：0555-23-0202
http://www.geocities.jp/mkin1962/

今、必要なのは、心をひとつに
“新生 にっぽんを目指す気概
―古くて新しい生き方の追求を―

代表理事　法村香音子

この号はＮＰＯにとっては記念すべき第３０号であるが、被害の大きさが明らかになるにつれ、「大災害に対し、心よりお見舞い申し上げます」という言葉を掲げることさえ白々しく感じられて、書けない。なぜなら、これはまさに自分自身が被っても不思議はなかったおおごとだからだ。

石原・都知事が「奢りへの天罰」と言い放ったという記事には息を呑んだが、自分は蚊帳の外といった彼の言論への是非は兎も角、際限なく快適・便利を求めてここまで突っ走って結果だとは、国民誰しもが思っているのではないだろうか・・・。

地震が誘発した津波による冷却用海水の循環停止という、日本中のどこででも起きうる原発事故。いまになって被ばくが怖いと騒いでいるが、最近の急速な「ＩＨ」の普及は、原発が供給する豊富な電力と決して無関係ではない。それなのに、この日本という小島の周りを５４ヶ所もの原子力発電所が取り巻いていることを、そしていまの快適はそれに頼ってきたことを、どれだけの人が意識して生活してきたか・・・。

この度の未曾有の災害は、神様が舌打ちしただけなのかもしれない。神様が本当に怒ったら、いまごろ日本は丸ごと全滅していたかもしれないのだ。人ごとのように、救援だの、頑張れだの、と遠巻きに云っている場合ではない。謙虚に生きることを忘れ去っ

ポチたまの部屋

東日本大震災は未曾有の被害をもたらした。東電福島原発が放射能漏れを起こし被ばく者が出た事態は極めて重要だ。放射能による健康被害の恐ろしさは、広島・長崎の原爆が証明している。「大地震でも大丈夫」と言っていたのに原発で事故が起きた。今更「だから言ったじゃないの」と言っても始まらない。当地は中部電力浜岡原発から、１２０キロくらいしか離れていない。今後の地震でも浜岡原発で事故が起きないことを祈りながら、日常生活で節電を徹底したい。（A）

てきた人類に対するこの“罰（適切な表現かどうか分からないが）”を東北関東が一身に引き受けてくれたのだとおもうと心が痛む。

図らずも、3月18日から10日間は花巻高校と福島西校が“青少年センター赤い屋根”宿泊の予定であったが、大震災発生以来連絡がなく、電話がつながらず、災害に巻き込まれたかと心配していた。5日経って連絡が入った。福島西校はなんとか無事であったが、花巻高校の生徒に津波の被害があったという。

両校の来訪を心待ちしていた当センターでは、災害発生の翌日「災害地救援物資（募金を含む）集荷所」を設置し、避難場所として被災地の方々を受け入れる用意があることをいち早く市に申し出た。そして市も、現在その方向で動いている。

灯油の床暖房から薪ストーブへ

私個人の場合、地震発生後の今日まで10日間、2日に1度のお風呂と煮炊きにLPガス少々を使用、テレビとパソコンは、有ればありがたい電力のお世話になってしまうが、照明は60ワットのスタンド1本で過ごしている。

灯油を使う床暖を使用しなくても薪ストーブで家中が暖かく、その上に載せている野菜の煮込みは、味噌・スープ・カレーと味を変えたりうどんの煮込みにしたりで3日間食べた。薬缶はいつも湯気を立てている。

こうしているうちに、やがて流通が正常に戻るだろうと、食糧の買い出しはおろか、ガソリンさえ入れていない。暖かい炎さえあれば気持ちが落ち着く。非常時用に七輪も木炭も置いてある。けれどまだLPがあるので、昨夜は“ハガマ”でご飯を炊いた。うっかりしていて吹きこぼれたが、香りの高いお焦げもできた。できる限りの“スローライフ”を、この機会に実行に移しているところだ。

これから始まる復興にあたって、国中にあり余っている間伐材をこの際有効に使う手だてはないものか。乾燥に時間が必要かもしれないが、これだけの大災害では仮設住宅の建設にさえ時間がかかるのは必至。そのあいだに不景気でいま仕事がない建築家や大工さん、左官屋さんや水道やさんを全国から募り、被災地の各家庭から新しい住まいに対する希望を聞き取って設計したり検討したり木を削ったり、地域ごとに村や町を再建する、その資金や物資を全国民で支える、などということも可能ではないか。

戦後復興期の中国では、子どもや女性が石を割って砂利を作ってモッコを担いで道路や堤防を建設、枝を落とし皮を剥ぐ材木作りにも加わった。この子等がいま国家の中枢に多くいるのである。にっぽんも、いまこそ全ての国民が新しい国作りに取り組むとき、愛国心を育てる時だと思う。

良いと思ったことは、すぐに実行する

アイデアや提案を頭から否定せず、「ああじゃないか、こうじゃないか」と推測でものを云うことをやめ、周りの様子や空気を測ったりしていないで、良いことだと思ったらためらわずに口に出し実行する。それが正しいことで何らかの裏付けに基づいたものであるなら、例えその時は受け入れられずに時間がかかるとしても、信念をもって行動していれば必ず実現する時が来るものだ。みんながそのように考えて行動する、それがまさに進歩であり、社会が変わる時なのだと思っている。

先日、枯れて倒れた大銀杏の根から無数の新芽が屹立しているのをテレビで見て、戦後の復興時の日本人の生命力と逞しさに思いを致したばかりであった。

科学雑誌“ニュートン”に、確かこんな記事があった。

――無機物には再生の能力も生きる力もない。例えば砂で作った造形物。一旦崩れたら他の力を借りない限りもとには戻らない。でも有機物の赤ちゃんは、誰に教わらなくても起きあがろうとするようになる。幼子はころんで泣いていても、やがては自分で立って歩き出す。有機物には元来“生きる力”が備わっているものだ――

しかし、同じことを繰り返すのでは辛い経験を生かすことにはならない。復興・再生からもう一歩進んで、“生きる力”に“生き方”を加え、“新生”を目指すことこそが必要なのではないだろうか。

浜岡原発の「無事故」を手紙で訴えよう

会員 秋 山 紀 勝

平成２３年３月１１日、東北・関東地方を未曾有の地震が襲った。Ｍ９・０。この地震は福島県にある東電福島原発に壊滅的な被害を与えた。日頃、東電は「大地震でも絶対に安全」と言っていただけに日本中が驚き、現地から約１３０㌔離れた富士山の麓でも「タイヘンなことになった」という声が聞かれた。新聞報道によると、東電は「想定外の大きな地震だった」と弁解しているが、「今更、何を言っているのか」と言いたい。東電の責任は計り知れなく大きい。

「福島は遠いから安心だ」とは言っていられない。ここから１２０～１３０㌔の静岡県・御前崎市には「中部電力浜岡原発」がある。中部電力も長年、「大きな東海沖地震が起きても事故は起きない」と言ってきた。しかし、今回の福島原発事故で、この言葉は信じられなくなった。

万一、浜岡原発で今回の東電福島原発のような大きな事故が起きると、漏れた放射能が当地まで流れてきて、富士山麓は取り返しがつかない事態に陥る可能性がある。生活している私たちの健康には当面、影響がないとしても、観光客は激減、野菜や湖で捕れる魚は食べられなくなるだろう。万々一、私たちの健康に放射能障害が起きれば、集団移住にもなりかねない。

中部電力は、４年後に６号機の着工を予定していたが、今回の東電福島原発事故に鑑み、その建設計画を先送りする方針を決めた。そこで６号機建設にかける費用を現在、稼動している原発（１号機～５号機）の安全のために使って、「原発は絶対に安全」を徹底してもらいたいと思う。

この際、一人でも多く、中電の水野明久社長あてに手紙・はがきを出したい。文面は「万一、大きな地震が起きても浜岡原発では絶対に事故が起きないよう万全の対策を取って下さい。お願いします」でよいと思う。手紙・はがきを出す場合、差出人の住所、氏名を明記したい。

宛先　〒461･8680 名古屋市東区東新町1番地　（電話 052･951･8211）
中部電力本社社長　水野 明久様

市民ふれあいの場に感動　ＮＰＯと私の５年間

会員 木暮（きぐれ）ひとみ

私とＮＰＯの出逢いは５年前の３月です。

ふれあいセンターのスタッフの一人として、お手伝いをと思い参加させてもらいました。

先ず玄関の開け方から教えてもらい、他のスタッフに迷惑をかけない様にと何とか１年が過ぎた時にＮＰＯの会計を任されました。会員の皆様の大切なお金を預かる事に不安も有りましたが、ＮＰＯの会員として少しだけ認められた気がしました。毎年３月になると総会での会計報告に緊張しています。

ふれあいセンターでは毎年恒例のセンター祭りがあります。前日から、買い物、うどんに焼きそば作り、バザー担当者は仕分けに値札付け、和服姿のお茶席など、それぞれの持ち味を生かした楽しいイベントです。また、クリスマスツリー、おひな様の季節毎の飾り物、正面玄関にはいつも素晴らしい花を生けて頂き、来館する人達の目を楽しませてくれています。

利用者の人達との挨拶と何気ない会話、可愛い学童の「ただいまー」と言う声に元気をもらいます。やっぱりここは〝市民ふれあいの場所〟です。

４月から新たに６年目になります。もっともっと素敵なふれあいのセンターに成る様にと思います。

昨年の７月から青少年センターのスタッフとしても参加しています。

１年で一番忙しい夏に、何も分からないままのスタートでした。館内を走り回り、電話の問い合わせに戸惑い、聞かれた事に即答出来ない事もあり、お客様の厳しい声に、自分の力不足に、くやしく涙を流した事もありました。

そんな時、法村さんの「スタッフは私が守るから大丈夫」と言ってくれた言葉に何度も救われました。

全員で頑張り抜いた夏が終わり静かな秋になり、青少年センター『赤い屋根』のオープンパーティー、卓球とバトミントンで汗を流し、レストラン風にレイアウトされた食堂、ろうそくの灯りも一役かい、美味しい料理を前に皆で乾杯。先輩方のちょっとほろ酔いの姿に心温まる夜でした。

冬になりノロウイルスと言う大きな出来事がありましたが、スタッフ一同こんなに頑張って来たのに、と悔しいおもいです。私も体験した一人です。申し訳ない気持ちで毎日落ち込んでいました。関係者は対応に追われ、頭を下げている法村さん達も本当に大変だったと思います。

そんな時、皆の気持ちが少しでも明るくなるようにと、真っ赤なチュウリップの花をセンターに届けてくれた方がいます。ありがとう！

この件が落ち着いた頃、３月１１日、東日本大震災が起きました。センターには、福島と岩手の高校の春休みの予約が入っていました、連絡が取れるまで１週間近くかかり、家が流された生徒さんもいると聞きました。青少年センターは１００人以上の宿泊が出来ます。人ごとではないこんな時、センターを、被災者の為に使用したいです。

『やってみなければわからない、あと一歩前に進もう』。今、そんな気持ちです。

会員の絆･心の支えの役割　広報紙「ぼちぼち」が３０号に

会員　佐 藤 み ど り

３月１１日突然、日本列島を襲った大災害。地震、津波、原発と３つが重なり、東北関東大震災は、千年に一度と言われる大災害として、多くの人の命を奪い生活をも一変させてしまいました。被害に遭われた多くの犠牲者の皆様に心よりお見舞い申し上げます。また被害に遭われた方のご苦労を思うと、何かしなくてはいられない心境に駆られます。

各種団体で支援物資の回収が始まり、私が参加した募金活動も、ほとんどの人が大変協力的でありました。ふつうに暮らせる事への感謝、特に命の大切さや家族の絆、支え合うことの大切さなど、私たちに多くのことを教えてくれました。

諸外国の支援者からも、日本人は忍耐強く他者への思いやりが強い等、高く評価されておりますが、本当に誇りに思います。

「２１世紀は精神文明の時代。物質中心の時代から心の時代へ」とうたわれていますが、いじめ、虐待、暴力等が後を絶たず、また、引きこもりや不登校、うつ病、自殺なども多発しているのが現状であります。少子高齢化が進む中で、人と人とのつながりを大切にし、孤立社会を無くしていくことが重要であると思います。これからは、一人ひとりの考え方を変えていくことと、私たちＮＰＯ富士北麓まちづくりネットワークのような活動がますます重要になってくると思います。

広報紙「ぼちぼち」も今回３０号記念となりました。法村代表を中心にみんなで力を合わせ知恵を絞り、いかなる困難をも乗り越えて理想を実現するために努力を惜しまず頑張ってきたＮＰＯの会員の皆さんの力は素晴らしいと思います。情報を共有できるこの広報紙「ぼちぼち」をこれからも継続していって頂きたいと思います。担当してくださった皆様に感謝！　感謝！です。

幸も不幸も自身の心で決まる。「心こそ大切なれ！」の言葉を胸に、全てを前向きにとらえ幸せの軌道に乗せていこうと、私自身もこれからの人生「ボランティア活動」に邁進していく決意です。

「備えあれば憂いなし」 東日本大震災に思う

会員 加 藤 正 貴

東日本大震災の発生後、2 週間もたつのに（執筆時・3 月 25 日）現地は未だ復興というより避難の状態です。心が痛みます。

青少年センターも受け入れ先に決まりましたが、「ぼちぼち」が皆様のお手元に届くころには、避難者が入所しているのでしょうか？　もし、入所しているのであれば数ケ月だと思いますが、滞在中に何とか復興への元気を取り戻せるよう心から願っています。会員一同で盛り上げていきましょう。

私もこの機会に改めて防災バッグを引っ張り出して中身を見てみました。手回し充電タイプのラジオを入れたことは覚えていたのですが、後は何を入れたのか忘れていました。入っていたのは、このラジオ（照明や携帯充電機能も付いていました）とアルミコーティングした防寒布、眼鏡（5～6 年ほど前に新しく購入したときにそれまで使用していたもの）、簡易トイレ用液体固化ジェル、賞味期限が 2009 年 10 月の乾パン、単 3 と単 4 を使用する懐中電灯 2 本（但し電池無し）、ポケットティッシュ 3 袋のみでした。

運よくバッグを担いで避難したとしてもどのくらい役にたつのかなぁーと反省する日々です。自戒を込めて上記の乾パンを 2 週間かけて昼食用に食べきりました。他におかずがありましたので全然問題ありませんが、乾パンのみだったとすると辛い食事ですね。

改めて防災バッグの中身を点検充実しようと思うのですが、あまり欲張って重くなっても避難に差し障りがあります。よく 3 日分の水と食料と言いますが、3 日分となるとかなりのボリュームになります。一万円程度の小銭を含んだ現金も必要でしょうね。下着類も必要でしょう。でも今回のような圧倒的な自然の力の前では、防災バッグを担ぐより、誰の子であっても子供をおぶって高所へ避難することが大事でしょうか？　富士北麓地域はユキシロや溶岩流・土石流の危険があります。

まず、自分自身が変わらなければ・・・・

会員 井 東 健 男

この小さな島国は、多くの戦乱や災害から立ち直り、悲しみや苦しみをも乗り越えてきました。人は時として、余りの苦難や試練を目の当たりにすると、無力感に打ちのめされ、いかに小さき者であるかを思い知らされます。ギリシャ神話にあるパンドラの箱にあるよう、どんなにこの世に不幸や苦しみが満ち溢れようが、希望を持ち続ける事が大切です。

更に、今この痛みを共有出来る意識の在る方々はたくさんおります。ひとり一人が出来うる事をして、支え合いましょう。節電をする、買い占めはしない、無駄なメールや電話は控える、募金をする。やれることは全てやり続けましょう。今、ここにある命や限りある資源を大切にしましょう。

苦しんでいる人々の声に耳を傾け、共に泣き、明日には立ち上がれるよう祈りましょう。

政府関係者や地方行政の首長・議員の責務は更に重大です。自分自身や家族や仲間が被災したものと受け止め、事に対処して行きましょう。情報も正しく開示して、共有しましょう。無意味に不安をかき立てる事無く、また危険から目を背けて安心感を与えるのも罪です。

天皇陛下、皇后陛下、皇太子殿下ご家族の皆様は、皇居が計画停電から除外されているにも関わらず、周りに合わせて、電気を止めているそうです。寒くても服を余計着れば良いと話されているそうです。国民と苦しみを分かち合おうとされている姿勢に感動を覚えます。一万人以上の犠牲者を悼み、被災地の復興と人々が悲しみや苦しみから少しでも早く立ち直りますよう、心から祈ります。

ちなみに、今回の津波で犠牲者を出さずに避難出来た海沿いのエリアがあったそうです。日頃より、誰が誰を連れて高台に逃げるのを決めてあったそうです。個人情報が制限されている現状ではなかなか難しい現実はありますが、防災は日頃の備えである事は国民の心に刻まれたでしょうから、小さいコミュミティーを大切にして準備しておくのは可能だと考えています。

ひとり一人からまちができ、それが集まって国が成立し、さまざまな国々が協力しあって、この地球に命が育まれているのです。議論や交渉は当然、大切ですが、まずは信じ合い、助け合いましょう。

そして、これを書いている自分自身がまずは変えられなければいけないと、任じております。全ての国民の安寧の日々が再び訪れますよう、心から祈ります。

今こそ、「不便」とは何か、考えたい？

青少年センター　夜番人　塚野孝志

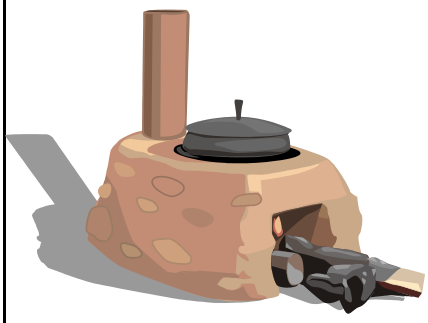
この度の　大震災　心より　哀悼の意を表します。そして一日も早い復興をお祈り致します。

今世紀始まって以来　私たち日本人が経験した事のない大災害　現地から送られて来る映像に胸が痛みます。

自然の前に人間なんて吹けば飛ぶ泡のようなものですね。

被災地の方々は本当にみなさん　不自由・不便を強いられています。　そして直接災害に遭っていない私たちにとっても電気一つ来ないだけで大変な生活を強いられています。

あまりにも便利になった今の世の中　もう一度考え直してみる必要があるのではないでしょうか。私が子供の頃　停電になったからとて　さほど不便でもありませんでした。



九州の台風銀座に住んでいた私　毎年夏には台風に見舞われます。　すると　必ず停電になる　復旧するまで1週間かかります。でも、そんなに不自由とは思わなかった。部屋には裸電燈が有るだけ　明るくなって起き、暗くなれば寝る。

電気炊飯器など無い　ご飯は薪で炊く洗濯機も無い　風呂も薪で沸かす五右衛門風呂。大家族　「お～いぬるいぞ！」　家長の一声に飛んで行き煙にまみれて火吹きで（知らないだろうな～）追い焚きをする　それでも不便とは思わなかった。

今のお風呂はスイッチ一つ押すだけ　テレビを見ていると　「お風呂が沸きました」とやさしいお姉さんの声で知らせてくれる。お湯が冷めない様に自動で 41℃を保つ。

ご飯が炊けたら「美味しいごはんが炊けました」と知らせてくれる　美味しいかどうかはわからないが・・・どこかの偉い人が話していましたが　その時はそれで不便とは思わなかった　今　思うから当時は不便であったと思うだけ

今　便利な世の中と言っているあなたも　100 年後の人から見れば　平成の人たちって何んて不便な生活をしていたんだろうね・・・と言われます　この際　贅沢をしないで　もう一度　生活を振り返ってみては如何でしょう。　上を見たらきりが無い、下を見たら少し居る　これで良いんじゃないでしょか。

下を見たら　3 人いました塚野です。

お手伝いのお手伝い　私の「北麓ネットワーク」との関わり

山 中 ジ ョ ー

私は当ＮＰＯの賛助会員である。先にワイフが正会員としてお手伝いを始めており、それに私がつき合う形で関わらせていただくようになった。これは、私がこれまで仕事以外の色々なことと関わることになったパターンのくり返しでもある。

私の当ＮＰＯでの数少ない体験からすると、男性もさることながら、はるかに女性の方が多く、そのめざましい活動ぶりが目につく。

私のおこがましい持論だが、これまでの世の中は、「オレがオレが」の男社会でやってきてなお十分とは言えない現状がある。人口の半分が女性である以上、これからは男性以上に女性の活動なくしては世の中の進歩はありえず、よって女性にはもっともっと活躍していただきたい。

その意味で、今や毎日が日曜日となった私が以前仕事をしていた世界は、遅れていると言ってもいいだろう。

ところで、私が日曜日の毎日を満喫するようになったのはつい最近のことだが、会う人毎にこれから何をするのかと聞かれる。正直なところ、他人様にお聞かせするほどのビジョンはなく、宮仕え（今さらチャンスもないだろうが）ももういい。しかし、世間の人は何かしていないと身のおきどころがないように思うらしく、何もしないというのでは不審の目を向けられかねない。

そこで、当ＮＰＯを引き合いに出させてもらい、今まで以上に関わっていこうと思っているなどと答えると、中には当方の充実していそうな暮らしぶりを勝手に想像して、うらやましがる人もいる。

私は、気力はともかく、体力は時とともに自信がうすらいでいくのを感じないわけにはいかない。そういうことも踏まえて、当ＮＰＯでこれから私なりにどんなお手伝いができるか模索しているところであるが、お手伝いのお手伝いといったところで、裏方に徹するのもいいかなと思っている。

富士吉田市立青少年センター

赤い屋根だより

電話＆ＦＡＸ：0555-23-7252
E-メール：akaiyane@mfi.or.jp
ホームページ：http://www.mfi.or.jp /akaiyane/

１、多くの痛みを伴った“ノロ食中毒事件”は、関係各機関のご協力によりようやく収束の運びとなりました。１ヶ月がかかりましたが、このことを仕事のやり方や設備改善の機会とし、食育部再建のためにスタッフ一同頑張っています。レンタルですが、念願だった食器洗浄機も導入の予定です。

２、３月１４日（月）の理事会で、今後のセンターの役割・あり方を勘案の結果、青少年センター指定管理者応募計画書のトップに挙げてあった“薪ストーブ”の設置が決まりました。

３、同じく上記理事会において、これも青少年センター指定管理者応募計画書で表明していた「障害者の自立支援事業」参画を決定。当面は週１２～１５時間程度。仕事は外回りや建物内の清掃をしていただくことですが、秋までに薪ストーブの管理などを習得、エキスパートとして働いて頂く予定です。私たちの新しい仲間として、みなさまのご指導ご協力をよろしくお願い致します。

４、イベント＆お知らせ

①お正月に、イングリッシュ・グリーンに赤い文字と白が映える”青少年センター“赤い屋根”の可愛い看板が道路に面して取り付けられました。

②昨年 12 月１日から始まった屋根の補修工事は１月１２日に終了。限りなく茶色に近い“赤い屋根”が輝いています。問題は、折角張り替えられた屋根にまた唐松の落ち葉が積もること。

③同じく昨年 12 月 14 日から１月半ばにかけて、センター開設後３２年ぶりに床のカーペット張り替え工事が行われました。今度は、汚れの目立たない薄茶色。

④1 月 23 日（日）10 時から、写真家外川英樹氏の指導で「第３回自主事業――動物の足跡探し」を開催。外川先生の楽しい説明に加え、センタースタッフによるお汁粉や手作りケーキでお腹も暖まるイベン

⑤家来がいなかったお内裏様と、お内裏様がお嫁に行ってしまった官女や五人囃子が今年は“赤い屋根”の下で目出度く合体。八段飾りの賑やかな一家となって、ロビー正面を豪華に飾っています。両側を彩る桃の花は、小野貞幸理事夫人実家の桃畑の作品です（菜の花が欲しいけれど、この際欲張らない）。

⑥3 月 22 日（日）10 時から開催する予定だった第３回「青少年センターｉｎエコマーケット」は延期しました。

⑦その代り、“赤い屋根”では「災害義捐金」「支援物資」を常時受け付けております。ご協力をお願いします。

⑧提案やアイデアがありましたら、0555-23-7252 へご連絡を。トとなり、３組の親子やご夫婦連れ参加者に大変満足頂けたようでした。

二度と不始末を起こさいよう万全の注意を！
ノロウイルスによる食中毒についての顛末書

富士吉田市立青少年センター“赤い屋根”指定管理者
特定非営利活動法人　富士北麓まちづくりネットワーク
代表理事　法村香音子

この度、当施設「富士吉田市立青少年センター“赤い屋根”」の厨房が１月２１日に提供しました食事により、ノロウイルス食中毒を発生させてしまい、習志野市立第四中学校生徒の皆様をはじめ、保護者様、学校関係者ほか多くの方々に多大なご迷惑をおかけしましたことに対し心より反省とお詫びを申し上げます。

今回の食中毒につきましては、山梨県富士・東部吉田保健所の調査の結果、当施設が提供した食事または食器に付着したノロウイルスによるものと判断され、同保健所長により山梨県知事名で、「当厨房を２０１１年１月２８日、２９日、３０日の３日間営業停止とする」通達および、富士吉田市教育委員会の口頭注意を受けました。

昨年の７月１日、本ＮＰＯ法人富士北麓まちづくりネットワークは、富士吉田市より指定管理者として当施設の管理運営を任され、特に食中毒につきましては細心の注意を払って運営してきたつもりでしたが、このような事態に至り大変申し訳なく思っております。

食中毒発生以来、本施設が行ってきましたことを以下に申し述べます。

１月２４日（月）の午前、習志野市教育委員会学校教育部学校教育課から、「富士吉田市立青少年センター厨房の食事を喫食した習志野市第四中学校の女子生徒のうち２１名と先生１名が、嘔吐・下痢等を発症して欠席者が出た」との知らせを受け、まだ原因が判明しなかったものの当施設は食事の提供を即時停止することに致しました。

２５日（火）午後、２１名の女子生徒発症者中４検体・教師１検体よりノロウイルスが検出されたとの連絡を受け、その時点で当食育部は活動を停止、富士・東部吉田保健所の指導のもと全館の一斉清掃・除菌作業を行うと同時に、原因究明にとりかかりました。

２６日（水）の午後、吉田保健所より、当厨房従事者の数名および喫食した総務スタッフからも、同型のノロウイルスＧ２が検出されたという報告を受け、期限を設けずに施設全体の営業を全面停止することと致しました。

１、ノロウイルスによる食中毒が原因と考えられる可能性の検証

① 何らかの形で、生食を前提とする食材（生野菜や生の加工食品）の一部にウイルスが付着していた可能性の追求。
② 何らかの形でノロウイルスが付着した食材の調理（揚げたり、焼いたり）の段階で、加熱（揚げる・焼く・炊く等）時間が不足していた可能性の追求。
③ 食材納入時の梱包物やケース等に何らかの原因でウイルスが付着しており、これにより厨房内にウイルスが進入、その後の取扱等の過程で食材にウイルスが付着した可能性。
④ 何らかの形で、外部から来た人（利用者等）にウイルスが付着しており、その人が手をよく洗わずに食堂内のカウンター等に触った。ウイルスの付着したそのカウンターなどを厨房従事者が触り、盛り付け段階で食材にウイルスが侵入した可能性。
⑤ スタッフ全員・施設関係者の家族を含め、健康状態をチェックした。

２、上記５項目の場合を想定した食中毒防止にむけての具体的対応策。

保健所の指導「手洗い消毒のやり方（パンフレット参照）」を中心に、以下の方策と従業員の研修をおこなった。

① 食材にウイルスが付着した可能性を考え、冷凍を含めて保存食材はすべて廃棄処分した。
② 当分の間、野菜は生での提供を中止し、すべて加熱調理（ゆでたり・炒めたり・炊いたり等）を行った上で提供すること。また、生食用の加工食品は使用しない。
③ 調理前の手洗いは液体石鹸３０秒・流水洗い２０秒を２回行う、を徹底する。
④ 食材を盛り付ける際は、必ずポリ手袋を着用。盛り付け中に他の作業をした場合は、必ず新しい手袋と取り替える。
⑤ 外部から来た人（利用者他）には、食事前の手洗いを徹底していただく(特に、青少年団体が自分たちで食事の盛りつけ・配膳を行う場合)。
⑥ ノロウイルスも含め食中毒全般に関する保健所の指導による予防策を、常に確認、徹底実行。
⑦ 食器洗浄機および業務用冷凍庫の導入。

３、手洗いの徹底励行・感染拡大防止のための注意

① 除菌洗剤で手洗いを２回繰り返しウイルスを落とすなど、充分な手洗いを行う（手の洗い方には人それぞれの癖があるので、それを承知して手洗いを徹底することも大事）。
② 調理器具の洗浄殺菌（使用後の洗浄・加熱殺菌）および、食卓・カウンター・配膳台は次亜塩素酸ナトリウムによる拭き上げを行う。
③ 食材の加熱処理。（中心温度８５℃以上で１分以上、加熱したものを素手で触らないこと）
④ 従事者の健康管理（日常の健康チェック・手洗い・2枚貝の生食不可など）
⑤ 厨房内に入る前に、うがいを実施、排泄を済ませるなど。
⑥ 感染の拡大防止のため、消毒は次亜塩素酸ナトリウム使用する（ノロウイルスには、アルコールなどは効果がない）。
⑦「手洗い」「服装」「体調の確認」などのチェック表を用意し、作業開始時に互いに確認。
⑧ その他、兎に角注意を怠らず、念には念を入れる。

４、厨房営業停止解除後の運営・管理について

① この度、県から受けた通達は厨房の営業停止 3 日間だったが、代表の意志により大事をとって「厨房は無期限停止、施設の運営は当面１ヶ月の休業」とすることに決めた。
② しかし、利用予約も既に幾つか入っているため、宿泊の１団体とレクホール使用の青少年団体は「習志野青年の家」に受け入れをご協力頂き、もう１団体は遠来のため宿泊のみを提供し食事は外注で賄うことを了承してもらい、受け入れることとした（取り扱うスタッフ４名は検便を実施し、陰性を確認した）。
③ 2月末までは、予約済み団体の宿泊は実施するが、食事の提供は行わない。
④ その間に、原因の究明とその除去に万全をつくし、3 月１日からの受け入れ開始に向けて、運営・管理体制の建て直しを検討・構築する。
⑤ 陽性・陰性に拘わらず厨房スタッフは全員、その他必要と思われるスタッフの検便を実施し(2 月 24 日を予定)、陰性を確認のうえで宿泊・厨房共に運営を再開。

５、被害者への補償について

① 楽しく過ごすはずだった「ウインタースクール」を苦しみの記憶に変えてしまった責任は何を持ってしても償いきれるものではないが、誠意を尽くして対応させて頂くとした。
② ２月２５日（金）、保険会社を通して「示談書を交わさない」方向で纏まった。
③ 保険会社より、２月２８日（月）に習志野市立第四中学校に対し 114,740 円の銀行振り込みを行う旨のハガキ通知を受け、同日同校小松崎教頭先生にご報告申し上げた。

６、統括責任者として

今回の事件により、スタッフ相互の信頼関係構築が何より大切だということを改めて痛感しております。

現場スタッフの意見にもう少し注意を傾け、存在する幾つかの問題解決のために、早めに手を打つべきでした。しかしながら統括責任者としての目配りの足りなさ、決断の鈍さがそれを遅らせたと考えます。

我々の事業に対し多くの人々の協力をいただき、徐々に成果が挙っていることが実感できるようになってきた矢先のことですから、ハード面の改善だけでは防ぎ得ない怖さを感じ、食育部をやめるべきかと一時は悩みました。

しかしながら、食育部の設立は青少年センター運営事業の柱となる活動でもあり、富士吉田市が我がＮＰＯを採用した主たる理由でもあります。始まってまだ半年の幼い事業ですが、折りに触れ行政関係者の後押しも肌身に感じていた矢先のことでもあり、スタッフのやる気と期待に応えるためにも二度とこのような不始末を起こすことのないよう、万端の準備のもと万全の注意を払って事に当たろうと気を持ち直しているところです。

多くの感染者を出したことへの責任の痛感はもとより、各方面の信頼を一挙に瓦解させたことが誠に無念でならず、関係者のみなさまへ申し訳ない思いでいっぱいです。

今回の不始末を契機として、私どもは青少年の野外教育を担う重責を一層自覚し、スタッフ一同一丸となって衛生管理体制の見直しと再構をおこない、信頼回復のためひたすら努力して参る所存です。

事件発生以来５週間、問題の重大性に鑑み、充分とは言い切れませんが本市生涯学習課や「習志野市立富士吉田青年の家」渡辺潔氏にほぼ報告し、共に働き支えて頂きました。

また、習志野市立第四中学校ほか各中学校・習志野市教育委員会・富士東部保健所等各組織および個人の皆さま方には、陰になり日向になって指導し激励していただきました。

改めまして、ここに心より感謝とお詫びを申し上げます。

事務局だより

☆市民ふれあいセンター指定管理の応募締め切りは２０１０年１２月２４日でしたが、他の応募者が無く本ＮＰＯが継続して今後５年間の指定管理者になりました。事前プレゼンテーションでも、面接官より今まで積み上げてきた実績を高く評価されました。会員各位及びスタッフ一同の努力の賜物と心より感謝申し上げます。

☆２０１１年３月６日　山梨県民文化ホール（リハーサル室）において、二胡奏者・沈桂栄先生は、平成２２年度・第２８回「川名人」サロンコンサートに出演。ピアノ伴奏は、富士吉田市の音楽シーンでおなじみの「倍田敏江先生」。蘇州夜曲、チャルダッシュ、三門峡など息もぴったりに好演され、１５０人の観客を魅了しました。

☆３月１１日午後２時４６分に起きた東北関東大震災はＭ９。地震とその直後の大津波による死者行方不明者数は、３月２５日現在でも掴みきれず、その上、東電福島第一原発の放射能拡散状況が判然とせず、連日報道に釘付になっています。電力不足となり計画停電が実施され、国民経済に人心に深刻な影を落としていますが、日本国中は元より世界中から温かい支援の手が差し伸べられています。今後の見通しは、あらゆる分野で混沌としている状態で憂慮されています。

現状を打破するには一人一人が前向きに精神を高揚する他に無いと思います。

青少年センターは、１００人規模の避難民の受け入れを宣言し現在その準備に余念がありません。

ふれあいセンターは自遊大学、健康体操、二胡教室、麻雀教室、囲碁クラブなどあらゆる団体の了解を得て自粛のため２週間ほど休館とし、新年度に入る４月１日から順次活動を再開する予定です。

☆ＮＰＯの総会は従来、４月の早い時期に開催していたが、諸般の事情から本年は５月の中旬を目処に準備中です。

会報「ぼちぼち」は、インターネットホームページでもご覧いただけます。
アドレスは、 http://www.geocities.jp/mkin1962/

会報原稿大募集！！

bothiw03@friend.ocn.ne.jp
又は、mkin1962@ybb.ne.jp まで

広報渉外部会では会報原稿を随時募集しています。

街づくりに関することはもとより、何気ない日常の中で感じたことなど、テーマは限定していません、お気軽に投稿してください。投稿方法については、事務局まで問い合わせをお願いいたします。右記のアドレスにても受付ています。

会報「ぼちぼち」は、これまで会員の皆さんのほか多くの方々のご協力によりまして、今回節目の３０号を発行することができました。あらためまして、心より感謝を申し上げます。

振り返ると８年目になります。これからも会員相互情報共有、地域に役立つ情報をまとめ、皆さんに愛される会報「ぼちぼち」になるよう努力してまいりますので、引き続きご協力をお願いいたします。

ＮＰＯ富士北麓まちづくりネットワーク　広報渉外部会